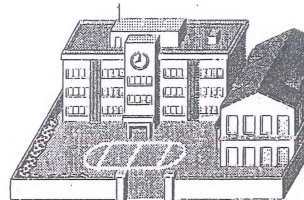


第3学年 高校一日体験学習について

3年生や保護者を対象として、夏休み中に高校の見学や体験ができる『一日体験学習』が実施されます。高校側では、中学生の一日体験学習にあわせて、高校の先生や高校生の先輩が、学校や学科の説明や発表・体験実習・授業見学・部活動の紹介などを計画してくれています。



この機会に、進学希望の高校を実際に自分の目で見て、よく理解したり、入学の意欲を高めたり、進路選択の一助良としてくださいます。保護者の皆様にとっても、高校をよく知るよい機会です。ご参加をお勧めいたします。特に県立高校は、この機会を逃すと他の説明会での機会がないので、よく検討ください。申し込みについては、後日、申し込み用紙と一日体験学習の内容についての一覧表を配布しますので、お子様とご相談の上お申し込みください。日程が重ならないようにご注意ください。

第2学年 社会体験学習について

7月2日(水)~7月4日(金)

今年は、下野市、壬生町、小山市の40の事業所で社会体験学習を実施する予定です。3日間連続で、同じ体験場所で体験します。

2年生は、本番に向けて準備をしています。5月19日から家庭訪問の期間中、生徒だけで、体験学習をする事業所へ出向いて、事前の打ち合わせをしています。

今後は、「体験学習の危機管理の学習」、「体験する職業についての調べ学習」、「進路適性検査」を経て本番を迎えます。2年生にとって貴重な体験になると思います。



人生の先輩 に 学ぶ

東京地方裁判所 さかにわ まさゆき

裁判官 坂庭 正将 さん

〇理屈っぽかった子ども時代

「子どもの頃から理屈っぽい性格で、何か疑問があれば親や先生にすぐ質問していました。大人から見ればちょっとかわいげのない子どもでしたね(笑)」

どんなことに対しても「なぜ、なぜ？」と追求する性格だった坂庭さんは、高校生になった時、将来について考えた。

「理屈を言ってもまわりから煙たがられず、それがむしろ仕事になる世界って何だろう？」そして思いついたのが、弁護士、検察官、裁判官といった法律家だった。

大学では、法律について一心不乱に勉強する毎日。在学中から司法試験に挑み、22歳の若さで、みごと合格した。司法試験に受かった後、まわりは弁護士や検察官の仕事に進む人が多かったが、坂庭さんはあえて「裁判官」という仕事を選んだ。

「弁護士や検察官は、『依頼人のために権利を守ろう』とか『被害者のために事件の真相を究明しよう』というように、『この事件をどうしよう』というはっきりした目標を持っていますが、裁判官にはそれがありません。何にもとらわれず、正義が実現される

ようにただひたすら正しいことは何かを追求する。それが退屈だと思う人もいるかもしれませんが、私にはその”愚直さ”が、かえって魅力に思えたのです。」

○自分で判決を下すという責任の重さ

裁判は、みんなも社会科で勉強したかもしれないが、市民や企業のもめごとを解決する「民事裁判」と、犯罪事件の審理と刑罰を決める「刑事裁判」とに分かれる。大学時代の頃から民事を専門に勉強してきた坂庭さんは、東京地方裁判所に入って念願の民事の裁判官になった。

民事の裁判では、企業間の取引や契約にまつわる大きなトラブルから、「お隣の騒音がうるさい」「知り合いに貸したお金が返ってこない」「会社を突然辞めさせられた」など私たちの生活に身近なトラブルまで、さまざまな事件を扱う。

裁判官は、こうしたトラブルに巻き込まれて訴えを起こした人や、訴えられた人の主張を聞いて、今回の争点は何かを整理していく。そして「和解」といって、話し合いでの解決を勧めたり、話し合いで解決に至らなかった時は法廷で判決を下して決着をつけるのだ。

「自分で判決文を書いて、最後に署名をする時は、緊張感がありますね。自分の下した判断が、事件の当事者だけでなく、社会全体にまで大きな影響を与えてしまう可能性があることを考えると、その責任の重大さに身が引き締まる思いです。」

○言葉の意味を正しく理解して書く

裁判官の仕事で難しいところは、すべてにおいて”間違っ**て**はいけない”ということだ。坂庭さんはわからないところがあれば、手元にある六法全書をひもといたり、裁判所内の資料室に足を運んで関連する書物を探すのだという。

「法律書に書いてあることを『ただなんとなくわかった』というレベルではなく、法律の言葉の意味をとことん理解することが大切なんです。そうしないと間違っ**た**判断や決定をしてしまいかねません。本をよく読んで言葉を正しく理解し、それを正しく文書にする。まさに学校で勉強するような国語の基礎が、裁判官の仕事にも必要なんですよ。」

裁判官の着る黒い法服は、「何色にも染まらない」という意味があるという。坂庭さんは、何にもとらわれず、ただひたすら正しいことは何かを見つめながら、今日もまた裁判と立ち向かっているのだろう。

「5教科が仕事につながる 国語の時間」 ペリカン社 より

